



○ 社会的共通資本としての農業，農村

——宇沢弘文著「社会的共通資本」
(2000年11月，岩波新書)——

本書は，著者のこれまでの「自動車の社会的費用」，「近代経済学の再検討」等の著作に一貫して流れている「社会的共通資本」の考え方について，再整理し紹介したものです。

著者によると，「社会的共通資本」の概念は，近年の反ケインズ主義，新保守主義の経済学による「歴史の捻転」を是正し，より人間的で住みやすい社会を作るためにどうすべきかという問題を，経済学の原点に返って考えようという意図の下に作り出されたものだそうです。その定義は，「一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々が，ゆたかな経済生活を営み，すぐれた文化を展開し，人間的に魅力ある社会を持続的，安定的に維持することを可能とする社会的装置」であるとし，また，これらは，社会全体にとって共通の財産として，(市場的基準ではなく)社会的な基準に沿って管理・運営されるべきとしています。

第2章以下では，具体的な社会的共通資本毎に記述されていますが，最初に取り上げられているのが「農業と農村」です(続いて都市，学校教育，医療，金融制度及び地球環境)。

なお，「農業」という言葉は，林業，水産業も含めた広い意味で用いられています。

著者によると，現在の日本の農業は「最大の危機」にあり，その原因は，これまでの我が国の農政が，農業を一つの資本主義的産業と捉え，工業と同様の市場経済的な効率性基準を適用してきたためであるとし，この点で，旧農業基本法は「破壊的役割」を果たしてきたと批判しています。また，自由貿易により国内農業は消滅しても良いといった新古典派経済学的主張については，その論理的根拠の誤謬を指摘しつつ，「非現実的」，「反社会的」と切り捨てています。

更には，農業の生産過程は工業部門とは対照的で，自然と共存しながら，人間の生存に欠くことができない食料を生産し，自然環境を保全するという基本的特徴を有していることを強調し，著者はこれを「業」よりも「農の営み」として捉えるべきとします。また，「農業の問題を考察するときは，農業の営みが行われる場，そこに働き生きる人々を総体として捉えることが必要」，「一つの国が安定的な発展を遂げるためには，農村の規模がある程度安定的な水準に維持されることが不可欠」との主張は，私達が今後農村地域政策に本格的に取り組むに当たり重要な示唆を与えるものと思われます。

なお，農林水産省の研究所・試験場の活動は，「日本農業のおかれている陰湿な，閉塞的な環境のなかで，明るい希望と将来への展望を与えている」とも述べられており，研究所に身を置く者としては過分の評価とも思われますが，激励の言葉と受け止めたいと思います。

(りえぞん No.1，2001/8/19)

注：このコラムは，行政部局と当研究所との間の連携・情報交換の手段として霞が関分室が発行している連絡誌「りえぞん」において，農林水産政策や経済学を考えるヒントとなりそうな書籍や論文の内容を「ほんのさわり」だけ紹介することを目的として連載しているものです。